



第 122 号

発 行 者  
東筑摩塩尻教育会  
編 集 者  
会誌会報委員会

# 「学ぶ」と「つむぐ」

東筑摩塩尻校長会長 池上 良満



うに明日を信じ、夢見る力を信じて生きた花子の姿が、なぜか自分と重なって感動しました。

第一週目のあらすじです。

山梨県甲府の貧しい小作農家に生まれ育った「はな」は、家の手伝いのため学校に通えませんでした。一九〇〇年(明治三十三年)七歳の時、行商人の父・吉平からもらった絵本に強い興味を持ち、父に導かれ尋常小学校に通い始めます。

いきなりテレビの話で恐縮ですが、この九月末に終了したNHKの朝の連続ドラマ「花子とアン」。毎日楽しみにして観ていた先生方もいるかと思えます。私もその一人です。

「赤毛のアン」の翻訳者・村岡花子の明治・大正・昭和にわたる、波乱万丈の半生記をドラマ化したものです。山梨の貧しい農家に生まれながらも、アンによ

読み書きを習い始めた「はな」の聡明さに感心した父は、彼女を東京のミッションスクール・修和女学校へ編入させようと動き出します。家族と周囲に反対され諦めざるを得なくなるものの、「はな」の本を愛する気持ちは三年の年月を経て母・ふじと祖父・修造の気持ちを動かし、女学校への転校が叶います。

この一週目の内容は「学ぶ」というこ

との本質を考えさせるものでした。字も読めないのに父親からもらった絵本に目をきらきら輝かせる「はな」。授業でいうと「導入」の部分です。子どもの目がキラキラ輝くような導入をすることが大切だ、ということを教えてくれます。この「絵本」との出会いがなければ翻訳家「村岡花子」は存在していなかったのかもしれない。

本に興味を持ち、読み書きを習いたくなつた「はな」は尋常小学校に通います。課題解決への第一歩です。父親が導いてくれました。

読み書きができるようになってきた

「はな」は同級生「朝市」の導きで教会の図書室に忍び込み、たくさんの本と出会います。「学びを活かす場所」「学びたいという欲求を満たす場所」が現れます。か細かった「学びの糸」がだんだんとよれて太くなっていきます。教会の図書室で習ったことのない文字・英語と出会います。新たな学びのきっかけとなります。が、まだここでは本気になっていません。

修和女学校へ編入した「はな」は本物の英語と出会います。ネイティブな人間が話す本物の英語です。この「本物との出会い」が「学びの糸」をさらに太い強固なものにしていきます。学校教育でもこの「本物との出会い」を大事にしていきたいものです。今はやりの「パーチャール」では人間は育ちません。人間は人間によって育てられます。子どもにとって一番身近な人間は「家族」、次は「先生」

です。だから我々教職に就く人間は「本物の先生」にならなければなりません。「教員」ではなく「教師」です。第一週目に「はな」が父親がくれた絵本と出会った瞬間、教会の図書室にたくさん置かれた本、洋書との出会い。このドラマを観ながら、自分もああだったねと「あの時の感動・心の震え」を思い出しました。それとともに、教職についてから自分の専門関連の書物ばかり読んできている自分を寂しく感じました。もともと幅の広い学びをしなければならぬと、このドラマを観ながら自分を振り返りました。生涯学習の大切さを教えられた気がしました。

「はな」の口癖「想像の翼を広げて」が大好きでした。目をつむり、五感を研ぎ澄ませ、自分の思いを心に描く。そういえば自分も高校生くらいまでよくやっていたなあ、と思い出しました。自分の思いを具体的なイメージにして脳に映像化していく、という作業はとても大事で、その習慣は今でも役に立っています。子ども達にも是非薦めたい習慣です。

「赤毛のアン」に出てくる一節が何度も「花子」の口から繰り返されます。「曲がり角の向こうには、今は何があるかわからないけど、きつと、素晴らしいものが待っていると信じる。」

教育改革の曲がり角に差し掛かっている今、その先に何があるのか分かりませんが、きつと素晴らしい未来があると信じて一歩一歩進んでいきたいと思います。子ども達は「未来」です。

(両小野中学校)

# 特集 ◆我が校のふるさと学習

## 塩尻四宿四百年祭にかかわって

### 洗馬小学校

平成二十六年度は塩尻四宿四百年祭が行われるということで、昨年より本校でもどんな学習や参加ができそうかを考えてきました。

洗馬小は百二十五年の歴史があり、明治三十五年校舎の新築を記念して植えられた「門かぶりの松」でも有名です。地域からも大切にされている学校で、子ども達は地域講師の方に学ぶ機会にも恵まれています。学区には四宿も街道も通ってはいませんが、日本アルプスサラダ街道が走り、レタスをはじめ、この洗馬に伝わり地域の方に大切に継承されている文化が多くあることから、テーマを「レタス街道文化を楽しく学ぼう」と決め、クラブ、学年、地域の発表を行いました。発表内容は次の通りです。

クラブは本校に十あるうちの「焼き物」「郷土料理」「洗馬探検」が洗馬の文化を学べる場でもあります。「洗馬焼き」とよばれた焼き物は江戸末期から大正初期まで続き、うつわの表面の細かい石粒や黒い色の上にかかった黄色味を帯びた白い釉薬が特徴です。焼き物クラブでは、地域講師の先生方にろくろを使った作り方とたた板を使った板づくりを教わり

世界に一つの宝物をいくつも作る事ができました。郷土料理クラブでは、地域特産のレタスやドライアップル、パセリ、ブルーベリーなどを使ったスープ、おやき、お菓子作りをし、アイデア、美味しさ共に大好評でした。洗馬探検クラブでは、菅江真澄が滞在したとされる釜井庵、市名勝指定の庭園がある長興寺、しだれ桜や信斎焼きで有名な東漸寺、からたぎの峰を源流として奈良井川に合流する蜜も生息する美しい流れの小曾部川など、地域講師の先生と訪れ歴史を感じてきました。中でも男の子達に人気があるのは心念堂の不動明王の石仏で、ボールのような玉とバットのような剣を持っていることから地域の野球チームの神様として捧げられているそうです。

高学年の総合的な学習の時間では、四年生が初夏に行っている「奈良井川へのヤマメ稚魚の放流」と秋の遠足で訪れる「奈良井宿と中山道」についてあらためて調べたりまとめたりしました。五年生は、本校の大きな特色である「全校でのレタス栽培」と昨年度まで開催され出品していた地域行事の「サラダ街道かかし祭」について学習を振り返り、その様子学んだことについて寸劇をまじえ発表することができました。

地域代表には、学校がある芦ノ田地区で、二百二十年前から地域に受け継がれている「ささら踊り」を発表してもら

いました。これは、竹で出来たささらという楽器を鳴らしながら踊る盆踊りで、菅江真澄の日記にも記されていたものだそうです。

以上、このような発表を行う中で、これらが古くに街道を通ってこの洗馬の地にやってきたものであること、洗馬地域の方たちの努力によって継承され今でも大切にされていることを感じました。当日の発表では、会場のあたたかな拍手と講師の先生のご講評から、子ども達は歴史の重みや達成感を感じた様子でした。洗馬小ではこれからも地域の方にお世話になりながら「ふるさと洗馬」を学び大切にしていきたいと思えます。地域密着の強みを生かした地域学習の実践がこれからも展開できることを実感できた四百年祭でもありました。

最後になりましたがご協力いただきました皆様、ありがとうございました。  
(常盤明子)

## 地域とつながる「生坂大好きクラブ」

### 生坂小学校

生坂小学校は、全校児童七十三名、副学級一名、計七十四名のこぢんまりとした学校です。

本校のグランドデザインには、「地域とともに歩む学校」が掲げられており、村の皆さんには、学校の教育活動に、多方面からご協力いただいています。その中から、本年度、新たにスタート

した、「生坂大好きクラブ」を紹介します。「生坂大好きクラブ」とは、従来のクラブ活動を発展させたもので、「もつと自分たちの住んでいる生坂村のことを知ろう」という活動です。指導者は、村内在住の方をお願いしており、体験・活動を通して村のことを学んでいきます。以下にその概要を記しておきます。

#### 一 本年度の成立クラブ(指導者・活動先)と児童数

- (一) 生坂郷土料理クラブ(女・人輝きクラブ) 八名
- (二) 生坂PRクラブ(生坂大好き隊) 十名
- (三) 生坂里山クラブ(上生坂夢の里山の会) 十名
- (四) 生坂ボランティアクラブ(高津屋森林公園・農業公社・生坂保育園・デイサービスセンターはるかぜ) 九名

#### 二 活動回数

年間五回(火曜日の五・六時間目をあてる)

#### 三 各クラブの活動内容

- (一) 生坂郷土料理クラブ
  - ①よもぎだんご作り②七夕まんじゅう作り③手作り豆腐作り④とうじょうどん作り⑤手打ちそば作り
- (二) 生坂PRクラブ
  - ①京ヶ倉トレッキング②パラグライダー体験③ラフティング体験④CM・村自慢プレゼンテーション

ン制作、応募  
生坂里山クラブ

- ① 椎茸こま打ち・植樹・ワラビとり
- ② ③ アカゲラの巣箱作り
- ④ 巣箱かけ・薪割り・アケビとり
- ⑤ 間伐作業

(四) 生坂ボランティアクラブ

- ① 「はるかぜ」交流準備(切り絵作り)
- ② ワラビとり(給食に使用)
- ③ シソとり(農業公社の梅漬けに使用)
- ④ 「はるかぜ」での交流
- ⑤ 生坂保育園での交流

#### 四 児童の感想

○ぼくは、郷土料理を作るために、生坂の人に教えてもらえてよかったです。少しむずかしいところがあったけど、やさしく教えてくれたのでうれしかったです。生坂村はやさしかったり、ぼくらのために協力してくれたので、いい村だなと思いました。(郷土料理クラブ男子)

○私は、四・五年の時のクラブよりすごく楽しかったなと思います。初めてパラグライダーに乗って、初めて京ヶ倉に登山して、初めてラフティングをしてすごく楽しかったです。(PRクラブ女子)

○一生けん命にみんなと協力して楽しくできましたし、学校よりもみんなと笑ったりしゃべったりできてよかったです。アカゲラの巣箱作りができてよかったです。今度は夏には虫取り、秋にはまたばつさいと秋の植物探しもやってみたいです。自然をたくさん

ん満きつ  
できて、  
とてもい  
い思い出  
になりました。  
(里山クラブ  
女子)

○このク  
ラ

ラで生坂村の地域の人たちとの関わりが深まったと思います。いろいろなことがわかったし、保育園の子からお年寄りまで遊んだりできたのでうれしかったです。(ボランティアクラブ女子)



生坂里山クラブ 薪割り作業

#### 五 おわりに

クラブ活動を通して子どもたちは、地域の「人・もの・こと」と、たくさんつながりができました。職員にとっても、充実した活動であったと思います。この取り組みが、地域教材の開発など、新しい宝を生み出す原動力となるような予感があります。

(久保田岳秀)

### 京都で地域の イベントをPR

檜川中学校

檜川中学校がこの東筑摩塩尻教育会に加入して十年目となりました。それまでは木曾郡でしたが、檜川村が塩尻市と合併したことに伴って所属が変更になった

ものです。移転や学区変更ではないので一村一校の頃と変わらず、地域に密着した学校のままといいでしょう。

温かく協力的な地域環境に恵まれた本校では、総合的な学習の時間や生徒会を中心に、地域との関わりをたくさん持っています。今回は木曾漆器祭・奈良井宿場祭のPR活動について紹介します。

毎年六月に行われる漆器祭・宿場祭は今年で四十七回を数える一大イベントで、多くの観光客や買い物客で賑わいます。漆工芸は大切な地場産業で、特に木曾平沢地区には伝統工芸士の職人さんの数も多く、漆器を扱う店が軒を連ねています。奈良井宿は国の重要伝統的建造物群保存地区に指定され、歴史ある町並みを保存しながら日常生活をしている数少ない宿場です。

この大きなイベントのPRに中学生が関わるようになって今年で四年目になりました。初年度の五月末に木曾平沢駅や塩尻駅前でチラシを配り、宣伝したのが始まりで、二年目、三年目と少しずつ場所を変更しながら続けるうちに新たな課題が見えてきました。チラシを受け取った方の反応から、五月末に一度来た観光客が六月初旬にリピーターとして再び訪れる可能性は低いこと、塩尻駅前にはビジネス客や地元の方が多く、PR効果が薄いことなどがわかってきました。

そこで今年度は、四月に修学旅行で訪れる京都でPR活動を行うことにしました。今までよりも早い時期に、人通りの多いところで宣伝したいと生徒がアイデアを出してきたものです。また、この

計画を知った方から、公式チラシと一緒に中学生が手作りしたチラシをつけることよとのアドバイスもいただきました。さらに、地元の方のご協力により、この手作りチラシを持参したお客さんに漆塗りのスプーンをプレゼントすることになり、京都でチラシを受け取った人が訪れてくれればわかるようにしました。

四月十七日、修学旅行二日目の見学を終えて宿に戻ってきた生徒たちは、そろいの法被に身を包み、のぼり旗を持って京都駅に向かいました。意気揚々と到着したものの、初めのうちは人通りの多さに圧倒されて誰にどう声を掛けてよいか、尻込みしている生徒もいました。しかし、だんだん人込みにも慣れ、話を聞いてくれそうな人を見つけては声を掛けて、元氣よくPRできるようになりました。中には木曾出身の方がいて驚いたり、以前に来たことがある方がいて喜んだりしながら、PR活動が終わりまりました。

迎えた漆器祭・宿場祭当日。一人でも手作りチラシを手にしたお客さんが来てくれたらと、祈るような気持ちで待っていました。すると、遂に一組のお客さんがスプーンを受け取りにやってきました。

松本市出身で東京在住の方が、たまたま訪れていた京都でチラシをもらい、お母さんと二人で



来てくれたのです。さらに、しばらくすると今度は愛知からの二人連れ、時間をおいて新潟からの女性と、最終的にチラシ四枚、五名の来客がありました。

思った以上の成果に三年生皆で喜び合い、さらに実行委員の方からも感謝やねぎらいの言葉をいただきました。この活動を通して、生徒たちは地域に貢献できたうれしさや自分たちの活動が認められたり感謝されたりする喜びを感じ、同時に今まで以上に楢川を好きになり誇りに感じているようです。これからも地域と手を携え、楢川を大切に思い、楢川のために積極的に活躍できる生徒の育成を目指して取り組んでいきたいと思えます。

(米窪治紀)

## 我がふるさとの「善光寺街道」に学ぶ

聖南中学校

### 一 はじめに

善光寺街道四〇〇年の今年、本校では昨年から取り組んでいる「きささげ夢プロジェクト」(以下、夢プロ)の一つとして、善光寺街道の学習を取り上げた。夢プロとは、学校教育目標「質実剛健にして、道を拓く」の具現として、また魅力ある学校づくりの視点から聖南中みんなで取り組んでいる活動である。善光寺街道の学習の他、全校合唱、東日本被災地訪問の三つの柱で展開をしている。

### 二 善光寺街道の学習を通してふるさとをみつめよう

#### (一) ねらい

善光寺街道制定四〇〇年の年、きささげ夢プロジェクトで取り上げ、全校で実際に善光寺街道を歩き、追体験を通して、ふるさと筑北村の特徴を学ぶ場とする。

また、全校で立峠に立ちふるさとを見つめながら合唱をして、中学校時代の足跡とする。

#### (二) 青柳宿と切通し、観音寺を訪ねて

三年生が修学旅行の間一、二年生は善光寺街道学習の入門編として地元の「青柳宿」「切通し」街道沿いにある「観音寺」を訪れる学習をした。講師に善光寺街道協議会の会長さんをお願いした。

いつも通学等で通っている道で見慣れた風景であるが、足をとめて講師の先生の話の聞くと、なるほどなあと感じるものがあつた。「青柳宿」では、急な坂道沿いに石垣が積まれて家が並ぶ、石垣の下には用水路が通り先人の知恵を学ぶことができた。

宿場の近くにある「切通し」は戦国時代に岩山を切り開いてつくられた。実際に削ったの跡、周囲の百体観音をみて、善光寺街道の中でも名所といわれるふるさとの場所を心寄せた。



切通しの見学

#### (三) 全校で会田宿から立峠を越えて歩く

##### 立峠では全校で校歌を歌う

夢プロの一つ、「全校で会田宿から立峠を歩き、峠で校歌を歌おう」を行った。十月の下旬、春にもお願いした善光寺街道協議会の会長さん、地元の乱橋石畳の会の方を講師に、四賀支所から会田宿を通り、立峠を越えて、聖南中まで全校で歩いた。

##### ◇会田宿の町並み

青柳宿とは違った趣を感じ、宿場口の善光寺常夜灯をみて先人の旅人への気遣いを学んだ。

##### ◇「芭蕉句碑」から立峠登り口へ

句碑にある更級紀行の句の説明を聞き、松尾芭蕉も通った街道であることを実感した。立峠登り口手前の「岩井観音堂」で一里塚、磨崖仏を見ながら一休みし峠越えに備えた。

◇立峠からふるさとをのぞみ校歌を歌う  
登り口に馬頭観音があつたが、そこからの急な登りを実際に歩き、馬とともにこの場所を歩いた先人の苦労、馬頭観音の意味が実感できた。急な坂道を数百メートル登り立峠に辿り着いた。

##### 立峠からは、「ふるさと筑北」がよくみえた。今回の目的の一つ、

全校で校歌を歌った。峠からふるさとを見ながら歌う校歌。生徒は



立峠で校歌を歌う

どんな思いになっただろうか。

この後、石畳の道を歩いて乱橋宿まで行き、中ノ峠を通過して学校まで歩いた。

##### ◇講師の方の言葉

講師の方から「今は使われていない道であるが、この道によって今の地域が成り立ち、存在している。それを大切に考えるのは当たり前のことである。」という言葉があつた。生徒達にとって、善光寺街道からふるさとをみつめる言葉になった。

##### ◇善光寺街道を歩いている生徒の感想

・今は車で簡単に行けてしまう。昔の人は大変な思いをして街道を歩いた。  
・二つの峠をつなぐところにふるさとがあり、街道が大事な役目を果たしてきた。善光寺街道を誇りに思う。

### 三 おわりに

地形からみた街道とふるさと、街道の人の行き来による文化の発展、旅人への先人の気遣い、昔の旅人の苦労など、実際に歩くことで思いを深めることができた。立峠に立ち、全校で校歌を歌った体験は、中学時代の忘れられない思い出になるだろう。こういった学習が「ふるさと筑北」を誇れる生徒の姿につながっていく。

(仲 弘久)

### ◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆

本号では、「我が校のふるさと学習」をテーマとして、四校の取り組みについて寄稿していただきました。ご協力ありがとうございました。

